

受付番号

1

許可番号

大歯医倫 第 111157 号

研究課題名

骨格性上顎前突症例における顎矯正手術前後の咽頭気道形態の変化  
(オトガイ形成術併用の有無による比較)

研究責任者

松本 尚之

申請者

真岡 謙介

研究終了日

2024 年 3 月 31 日

所属

歯科矯正学講座

所属

歯科矯正学講座

職名

主任教授

職名

研修医 (非常勤)

申請の概要

近年、顎矯正手術による顎骨の移動量や方向の決定の際に咽頭気道の状態も考慮することが多くなっている。それは、顎骨の移動が舌骨の位置および咽頭気道形態に影響を及ぼすからである。骨格性上顎前突症に対する顎矯正手術として、上下顎骨切り術による下顎骨前方移動術は一般的な方法である。さらに、重度な下顎骨後退症に対しては主に審美的な理由からオトガイ形成術が併用されてきた。しかし、近年は審美的な理由だけでなく機能的な理由でもオトガイ形成術の併用が考慮される。これは、下顎骨の前方移動にともない下顎骨に付着したオトガイ舌筋やオトガイ舌骨筋が伸展することにより舌骨の位置に変化が起き、さらには咽頭気道形態にも影響を及ぼすとされているからである。

下顎骨の後方移動にともなう舌骨の位置および咽頭気道形態の変化についての報告は多く見られる。しかし、下顎骨の前方移動にともなう舌骨の位置および咽頭気道形態の変化についての報告は少ない。

そこで本研究では、重度な骨格性上顎前突症に外科的矯正治療を行った患者を対象として、下顎骨前方移動術にオトガ

---

イ形成術を併用した群と併用しなかった群での術前後の舌骨の位置、咽頭気道形態の変化および両群間の変化量を比較し、評価を行うことを目的とした。

研究対象として、重度な骨格性上顎前突症と診断し外科的矯正治療を行った 17 例の手術前後の側面頭部エックス線規格写真を用いる。17 例のうち下顎骨に対して下顎枝矢状分割術のみ施行した患者は 8 例、下顎枝矢状分割術にオトガイ形成術を併用した患者は 9 例である。

本研究により、下顎骨前方移動術へのオトガイ形成術併用の有無が、舌骨の位置および咽頭気道形態に与える影響について明らかになれば、重度な骨格性上顎前突症に対してより機能面を考慮した矯正治療計画の立案が可能になると期待される。